

戦地からの便り

佐川町 植田 和



祖父からの便りを読み返すたび、とても悔しい気持ちになる。

そして、なぜ、もっと早く敗戦しなかったのかと。

昭和19年10月22日に満州に出征し、終戦の一週間前、38歳で亡くなったと聞いている。長女である私の母は当時、16歳、5人兄弟の末弟は小学一年生だった。

その祖父からの便りは毎回、「私は元気で奉公してるよ」「農作業の指示」「内地のニュース」「留守を任せている多忙な家族への労いの言葉」で綴られていた。

きっと、過酷な戦地でも家族・田畑のことばかり気になっていたことだろう。又、祖母もよく手紙をだしていたのだろうか、家の事情が克明に書かれていた。

私は、写真の祖父しか知らないのに、とても身近に感じられる。

その住所は、満州第八七八軍事郵便局気付大井隊長良隊 刈谷楠義 となっていた。

なにか手掛かりはと、ネットで検索してみたが、わからなかった。しかし、テレビで「かつての満州国 たった一人の日本人」という番組で旧満州を初めて目にした時以来、遺骨も帰っていない、祖父の眠っている満州の地を一度は訪れてみたいと思っている。

その苦勞した祖母は、平成3年85歳で他界した。勝手な想像だが、祖父は満州の地か

ら、女手一つで、家族を守り育ててくれて祖母にきつと感謝しているのではないかと思う。



しかし、汗水して手に入れた田畑が農地改革を受けたことは悔んでいるかもしれないが。

ところで終戦50年にあたる22年前、私は初めて、東京で開催された全国戦没者追悼式に参列した。また、昨年11月には、新たな思いで、沖縄での「慰霊巡拝の旅」に参加

し、海の見える景色の素晴らしい場所に建立
されているが、当時は凄惨な戦場であった「土
佐之塔」の慰霊祭に参列させていただいた。

そして全員で「里の秋」を歌った時、思わ
ず、この詩が父や夫、息子の無事を祈ってい
る光景が目には焼きつきしばらく涙を止める
ことができなかった。

今年も、平成 29 年度高知県遺族会遺族大
会に参加した。私の母も 88 歳、遺族も高齢
化してきている。

いま、世界各地ではいまだに悲惨な戦争が
繰り返されているが、私のように祖父をそし
て、家族を考える時、決して他人事とは思え
ない。

戦後 72 年が過ぎ、戦争を知らない世代が
多数を占めてくる中、祖父の願いを忘れない
ためにも、孫、ひ孫がその歴史をしっかり継
承していかなければならないと心から思い、
そして強く平和であることを願っている。

※平成 29 年 10 月号高知県遺族会報掲載